

# 診療情報の意義と役割を明らかにした大著

【評者】 高久 史磨  
自治医科大学 学長

日本診療情報管理学会 編  
『診療情報学』

平成 17 年 4 月に施行された個人情報保護法によって、患者の個人情報とは原則として患者自身に帰属するものであることが明示された。一方、病院医療の現場では、チーム医療の推進のために、診療に関する情報の一元化と共有化が最近特に求められるようになっていく。今回、医学書院から日本診療情報管理学会の編集による『診療情報学』が刊行された。本書の目的は、医師、看護師をはじめとする医療従事者が記載、作成する記録や取り扱う情報を「診療情報」として体系化することに関する基本的な事項について解説し、同時にその体系化の問題点や今後の課題を示すことによって、診療情報の意義と役割を明らかにすることにある、と編集委員の大井利夫氏が本書の序の中で述べられている。

現在のように、医療のすべての分野で高度化が進み、各種の医療専門職が患者を中心に医療を展開するチーム医療の場において、安全で質の高い医療を遂行するためには、正確な診療情報を速やかに医療従事者間で共有することが絶対的な条件となっている。しかし現実には、診療情報の収集、管理保管、その活用については多くの解決すべき問題点があり、統一した方式や知識が未成熟の状態にあるため、診療に関するデータは数多くあるが、本当に伝えるべき情報が少ない、いわゆる Data - Rich - Information - Poor Syndrome (DRIP Syndrome) の状態にあると言わざるを得ないのが現状である。

しかし、個々の生のデータを正確に収集し、そのデータを評価し、取捨選択して記録することが臨床の現場

では極めて重要である。こうして集めた情報は医療機関の経営管理や医学研究に利用され、そのことが医療の質の向上に寄与するのは疑いの余地がない事実である。本書は「Ⅰ・診療情報学総論」、「Ⅱ・診療情報の価値の高めるためのシステムと評価(診療情報学と応用)」、「Ⅲ・診療記録の種類と記載法」の 3 部によって構成されており、その内容も極めて密度が高く、総頁数も 456 頁に達している。その意味で本書は正しく診療情報に関する大著と言えよう。

執筆者の方々は日本診療情報管理学会の役員を含めいずれも診療情報分野の専門家、あるいは実務の担当者であり、本書は日本診療情報管理学会が診療情報に関するわが国の諸問題に関する現時点での統一した見解をまとめた本であると言えよう。したがって本書の刊行はわが国の医療の質の向上にとって極めて重要なことであると言ってしまう。医療に関係するすべての方々に本書を参照されることをお勧めし、本書の書評の締めくくりとさせていただきます。



B5 頁 456 2010 年  
定価 8,400 円(本体 8,000 円+税 5%)  
ISBN978-4-260-01083-2 医学書院刊